

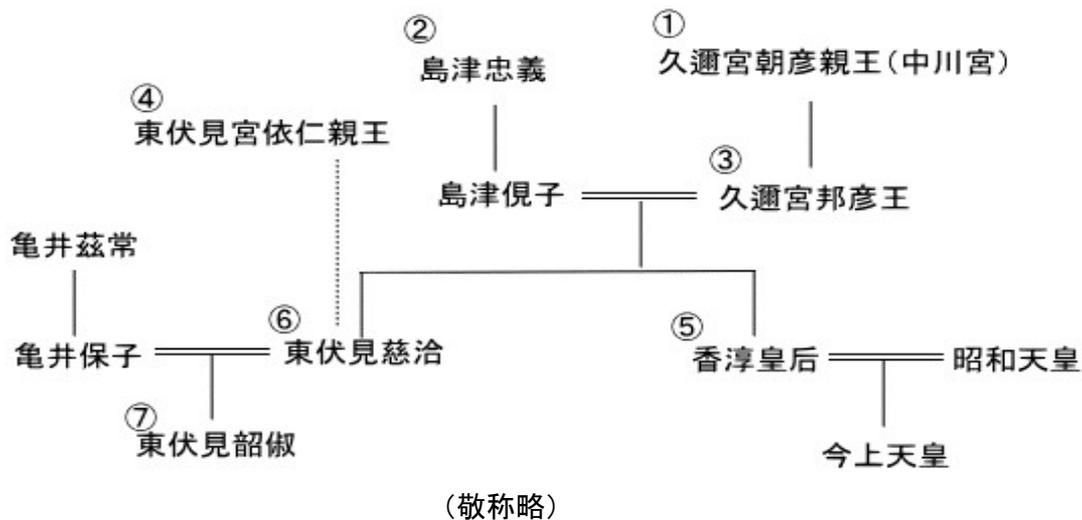
旧皇族家異聞

葛南支部 小浦泰之

はじめに

私は以前長野県のホテルで支配人を務めていたことがあります。そのホテルの社長が今上天皇の従兄弟にあたる方で、旧皇族家の出身でありました。その縁で今上天皇がまだ皇太子の頃に、ご一家でそのホテルにお泊りにいらしたこともありました。今回はそのホテルの社長の家系図をたどり、私が社長に直接聞いた話なども交えながら旧皇族家にまつわる歴史の秘話をひも解いてみたいと思います。

(1)家系略図



まずはホテルの社長のご紹介からしてまいりましょう。

社長は⑦東伏見韶俣(ひがしふしみあきよし)氏です。長野県の蓼科でホテルハイジという名のホテルを経営しており、現在もご健在です。

ホテルの敷地というのが東伏見宮家の別宅があったところで、お父上所有のその土地を借りて、社長がホテルをオープンしたのが1975年のことです。

私が在籍していた頃は、結構な地代家賃をお父上に支払っていた記憶があります。

お父上は2014年にお亡くなりになったのですが、奥様の保子夫人は2009年に亡くなり、息子が3人いるので相続がどうなったのか、仕事柄大変興味深いところです。

残念ながら私は2012年にホテルを退職したので、どういう形で遺産分割が行われたのかは不明です。ちなみに社長が長男で、次男の慈晃氏が青蓮院門跡の門主を史上初めて世襲しております。

社長は、自身は生れたときから皇族ではなかったものの、地元の人達から「宮様」と呼ばれており、一種の畏怖のようなものを抱かれながら尊敬をあつめております。

実際に仕えた身の私としては、感覚が一般人と違うなあと苦労させられることがしばしばでした。

ホテルは開業以来、天皇陛下ご夫妻、皇太子ご夫妻、秋篠宮妃紀子さまや英国フィリップ殿下など国内外のVIPを数多くお迎えしており、多くのお客様に愛されています。

旧皇族家異聞

(2)東伏見家

ここで東伏見家について見ていきましょう。

社長のお父上は⑥東伏見慈治(ひがしふしみじごう)氏という方で、長らく京都青蓮院門跡の門主を務めた方です。

この方のお姉さまが⑤香淳皇后で、昭和天皇のお后とられました。

この方は久邇宮家出身で、邦英王と名乗っていましたが、
④東伏見宮依仁親王に大変可愛がられ
親王夫妻に子女がなかったため、東伏見宮家に「お預かり」という形で御移りになりました。旧皇室典範では皇族に養子は認められておらず、依仁親王が薨去された際に喪主を務めるも東伏見宮を皇族として継承することはできませんでした。



東伏見慈治

しかし養父の慈愛を深く謝していた邦英王は東伏見宮家の祭祀を継承するため
臣籍降下を願い出、認められて「東伏見」の家名を賜り華族に列せられました。

伯爵となったのちは京都帝大を卒業し、同大の講師を務めたり、
ピアニストとして日本のオーケストラにとって草分けと言える近衛秀麿指揮の
新交響楽団とともに世界初のハイドンのピアノ協奏曲ニ長調の録音演奏を行うなど、
文化的活動を中心に活躍しました。

その後1953年に青蓮院の門主となり、長らくその地位にありました。

青蓮院の属する天台宗は住職の世襲を認めていないのですが、慈治氏は次男の東伏見慈晃氏に
門主の地位を譲ることを強く望み、天台宗教団と激しく対立したのですが、
最終的には史上初となる門主の世襲を教団側に認めさせました。

2014年に103歳の長寿を全うし薨去されました。歴代皇族の中での最長寿記録となっています。

強引に世襲を認めさせるなど、良くも悪くも私の強い性格の方だったようです。
この方には私もお会いしたことがあります。威厳に満ちていながら気さくな人柄の方でした。
社長とはあまり折り合いが良くなかったらしく、職務が忙しかったこともあったのか
ほとんど長野に遊びに来ることはありませんでした。

この慈治氏の養父で、東伏見宮家の創設者である
④東伏見宮依仁親王(ひがしふしみのみやよりひとしんのう)は
伏見宮邦家親王の第17王子として誕生しました。

明治18年に小松宮彰仁親王の養子となり(まだ旧皇室典範は未制定)
ましたが、彰仁親王とは折り合いが悪く、小松宮は継承せずに
新たに東伏見宮を創設しました。

この方は海軍の軍人で、イギリス・フランスに留学経験があり、
最終的に海軍大将にまで進みました。



東伏見宮依仁親王
1867 ~ 1922

大正11年に56歳で薨去され、元帥の称号を賜りましたが子女がなく
事実上の養子であった慈治氏が祭祀を継承したものの、
東伏見宮は一代で廃絶となったことは前述の通りです。

依仁親王には縁談に関して一つのエピソードがありました。

この方がまだ13歳の時、当時のハワイ王国の国王の姪との縁談がハワイ王国側
から提案されました。当時のハワイ王国はアメリカの圧力がかけられ、存亡の危機
に立たされていました。日本の庇護を求めようとの心積もりだったようですが、
国力増強に努めていた明治政府により提案は拒否され、幻の縁談となりました。

旧皇族家異聞

(3)久邇宮家

東伏見慈治氏の実家である久邇宮家は、明治8年に伏見宮家出身の通称中川宮により創設されました。

中川宮こと①久邇宮朝彦親王(くにのみやあさひこしんのう)は幕末期に公武合体派の領袖として活動し、過激な思想のために時の孝明天皇からも嫌われていた長州藩を京から排除するため薩摩藩や会津藩と手を結び、八月十八日の政変を行いました。

このことで孝明天皇からは深く信頼されたのですが、長州藩からは深い恨みを買うようになりました。

孝明天皇が崩御され、明治天皇が即位すると尊攘派公卿が復権し、朝彦親王は急速に求心力を失っていきました。全ての長州派公卿が復権したのち広島藩に預けられます。維新後、長州を中心とする新政府の中枢に入れるはずもなく、東京に移住することはありませんでした。



久邇宮朝彦親王

子息の中に終戦後の首相となる東久邇宮稔彦王がおりましたが、この父の冷遇を見て育ったため陸軍軍人でありながら長州派が占める陸軍の思想に染まらず、自由主義者となり日米開戦に断固反対したというのは歴史のいたずらと言えるかもしれません。

久邇宮家を継いだのは第三王子であった③久邇宮邦彦王(くにのみやくにひこおう)です。

この方は陸軍士官学校、陸軍大学校を卒業し、日露戦争にも出征して戦功を立てるなど、一貫して陸軍軍人としての人生を歩みました。最終的には陸軍大臣となり、死後は元帥号を贈られました。

しかし一番大事な歴史的な事実としては、王女を天皇の後として嫁がせ天皇の外戚となったということでしょう。

邦彦王の第一王女であった良子女王は、大正7年に皇太子裕仁親王との婚約が内定しました。

しかし、当時枢密院議長であった山縣有朋が、良子女王の母方である島津家に色盲の遺伝があるということを陸軍軍医総監から耳にし、皇室に色覚異常の遺伝子が混ざること懸念し始めます。



久邇宮邦彦王
1873～1929

元老の西園寺公望や松方正義に諮り、両元老の内諾を得た山縣は久邇宮に自ら婚約を辞退させようと画策します。

山縣は邦彦王に婚約解消を迫りますが、邦彦王は貞明皇后に拝謁し直訴します。また、過激派による山縣や当時の首相原敬、他の皇族の暗殺計画の噂が立ち上りこれ以上事を荒立てると、皇族の身に危害が及ぶと考えた山縣は、事態の収束のため宮内省に「婚約は予定通り」という発表をさせます。

この発表の前まで、この事件についての報道が禁止されていたため、新聞は一斉に「宮中某重大事件」として報じて、一大センセーションを巻き起こしました。

事件が解決したのち、3年後の大正13年に皇太子と良子女王は結婚をしました。

朝彦親王の項でも述べましたが、久邇宮家と長州藩には遺恨があり、また、島津家の血統が天皇家に入ることは長州閥の山縣には由々しき事態だったかもしれません。

朝彦親王が、息子の結婚相手に公武合体派だった島津家を選んだこともこのような重大事件に関係してくるところに、歴史の面白さがあると思います。

旧皇族家異聞

(4)島津家

久邇宮邦彦王に嫁いだ島津侘子(しまづちかこ)の父親が薩摩藩第12代の藩主で、最後の藩主であった②島津忠義です。

島津忠義は分家の出でしたが、伯父の島津斉彬の養嗣子となり斉彬の死後藩主の地位を継ぎました。

藩主としてはほとんど藩政には関わらず、西郷隆盛や大久保利通に実権を握られ主体性を発揮することはありませんでした。

ただ、忠義が藩政の実験を取り戻そうとしなかったことが、薩摩藩が倒幕運動に一致団結して取り組むことに寄与した面もあります。

島津家は鎌倉時代から明治時代にかけて同一の国を統治した、世界でも稀有の領主でした。代々巧みな外交戦略を駆使して長い年月にわたりお家を保ち続けたその血脈が、現在の皇室にも受け継がれていることは興味深いことです。



島津忠義
1840～1897

(5)最後に

旧皇族家の方とわずかですが関わりをもったことがあったので、今回この原稿を執筆してみました。

歴史に興味がある皆様でも、あまり旧皇族家の現在というテーマには関心がある方も少ないかも知れませんが、少しでも興味を持って読んでくださったのであれば幸いです。

今後も千葉県行政書士会歴史研究会員として、歴史の面白さを体感していきたいと考えております。

つたない文章で恐縮ですが、最後までご拝読ありがとうございました。

葛南支部 小浦 泰之